



~13  
3843  
8





門 へ13  
號 3843  
卷 8

繪本西遊記初編卷之九

前章之下



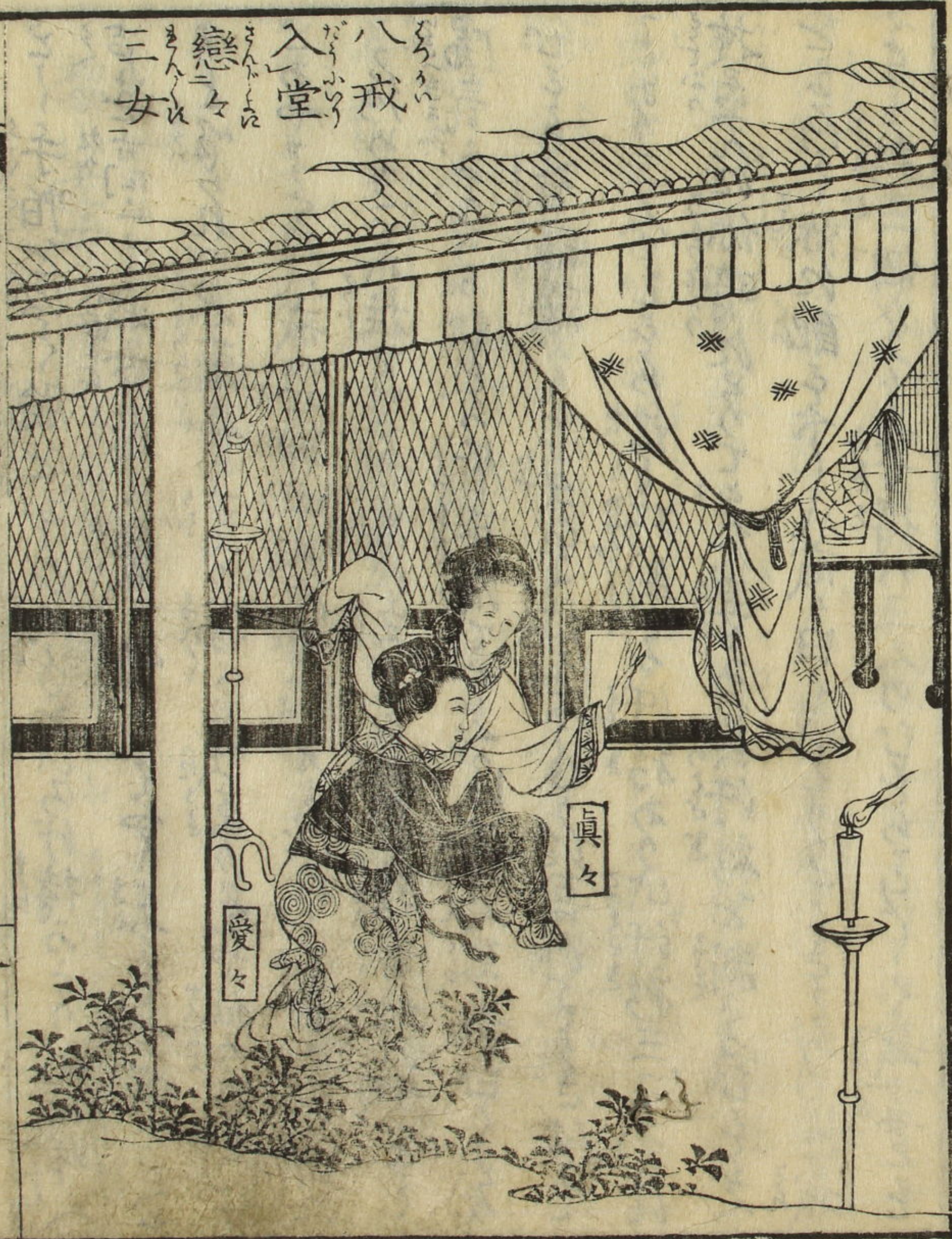
去<sup>さ</sup>とも八<sup>はち</sup>戒<sup>かい</sup>の<sup>の</sup>婦<sup>ふ</sup>人<sup>にん</sup>にいさなつれ後<sup>ご</sup>て内<sup>うち</sup>堂<sup>だう</sup>に至<sup>いた</sup>りて大<sup>だい</sup>同<sup>どう</sup>て  
 々<sup>々</sup>の婦<sup>ふ</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>女<sup>によ</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>め<sup>め</sup>て我<sup>われ</sup>に配<sup>くわい</sup>せ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>やと云<sup>い</sup>婦<sup>ふ</sup>人<sup>にん</sup>曰<sup>い</sup>く  
 我<sup>われ</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>決<sup>けつ</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>大<sup>だい</sup>女<sup>によ</sup>に<sup>に</sup>配<sup>くわい</sup>さ<sup>さ</sup>い<sup>い</sup>二<sup>に</sup>女<sup>によ</sup>恨<sup>うらみ</sup>む<sup>む</sup>一<sup>一</sup>二<sup>に</sup>女<sup>によ</sup>に<sup>に</sup>配<sup>くわい</sup>  
 する<sup>る</sup>三<sup>さん</sup>女<sup>によ</sup>ら<sup>ら</sup>む<sup>む</sup>一<sup>一</sup>三<sup>さん</sup>女<sup>によ</sup>に<sup>に</sup>配<sup>くわい</sup>する<sup>る</sup>め<sup>め</sup>は<sup>は</sup>則<sup>すなは</sup>ち<sup>ち</sup>大<sup>だい</sup>女<sup>によ</sup>ら<sup>ら</sup>む<sup>む</sup>人<sup>にん</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 計<sup>けい</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>や<sup>や</sup>八<sup>はち</sup>戒<sup>かい</sup>の<sup>の</sup>曰<sup>い</sup>く<sup>く</sup>若<sup>わか</sup>か<sup>か</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>て<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>三<sup>さん</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>女<sup>によ</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>わ<sup>わ</sup>が  
 妻<sup>つま</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>婦<sup>ふ</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>曰<sup>い</sup>く<sup>く</sup>你<sup>なんぢ</sup>胡<sup>こ</sup>説<sup>せつ</sup>事<sup>じ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>今<sup>いま</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>う<sup>う</sup>れ<sup>れ</sup>吾<sup>われ</sup>自<sup>みづか</sup>ら  
 計<sup>けい</sup>あり<sup>り</sup>今<sup>いま</sup>三<sup>さん</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>女<sup>によ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>咄<sup>うた</sup>び<sup>び</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>に<sup>に</sup>你<sup>なんぢ</sup>手<sup>て</sup>帕<sup>は</sup>を<sup>を</sup>以<sup>もつ</sup>て<sup>て</sup>面<sup>めん</sup>を  
 蔽<sup>おほ</sup>ひ<sup>ひ</sup>暗<sup>くら</sup>合<sup>あ</sup>手<sup>て</sup>に<sup>に</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>女<sup>によ</sup>と<sup>と</sup>你<sup>なんぢ</sup>が<sup>が</sup>妻<sup>つま</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>一<sup>一</sup>八<sup>はち</sup>戒<sup>かい</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>り

繪本西遊記初編卷之九



八戒入堂  
戀々  
三女

會一西遊記九



真々

愛々



降々

八戒

三



こゝ手帕とびく臉とあひ両手とひろげ待たうり時に婦人  
声と古同く我女真く愛く憐くやうあつて女婿と云ふ  
よと叫りれば忽蘭麝の薫り芬くと吹来り是や仙女の来迎  
とあやうこれ八戒の心神中天にたび身まびれもまきて西に  
よつゆりきて柱とびく東にまうて壁に墜着地に倒れ  
陽気なんぢがむとら皆車滑てとくかじ婦人あつて曰く  
むとら皆謙讓がうて互ひは身をまうのうだ吾別よよまはる  
とあり三人のむとら巧制する汗衫ありけ汗衫三つを  
控ゑんに你暗にうて身に穿まへ其汗衫を制するむとら  
とるのう你に配とて八戒曰くけうりときまめては我  
らら汗衫三個をう穿得の三人のむとらとく我妻とを

べしとて再び大まといろげて探り需るほどの果と一つ  
の汗衫の的うらうはとと身に纏ひ忽然として地に倒る原  
来是汗衫にあびらうと繩を幾條かきひ身を引縛つて  
動ふ事うらう候け時東方正に白かんとそれ三藏師と三人  
睡りそんく普く四方をう後せども明ああり高堂玉擲一字も  
又るば見松樹の下に綱くう風のおおげうより外にうら  
者とは三藏とはら師弟三人呆れ果我鬼のふに欺うれ  
るうとてうらうとれば松樹の上の帖をかけて八句の頌と記  
たり

黎山老母不思凡 南海普賢菩薩請下山 普賢文殊皆是客



八戒縛樹  
慚愧前非



悟空  
三藏



八戒

沙悟淨

五



化成美女在林間 聖僧擔漢禪機定 八戒貪淫劣性頑

從此洗心須改過 若生怠慢路途難

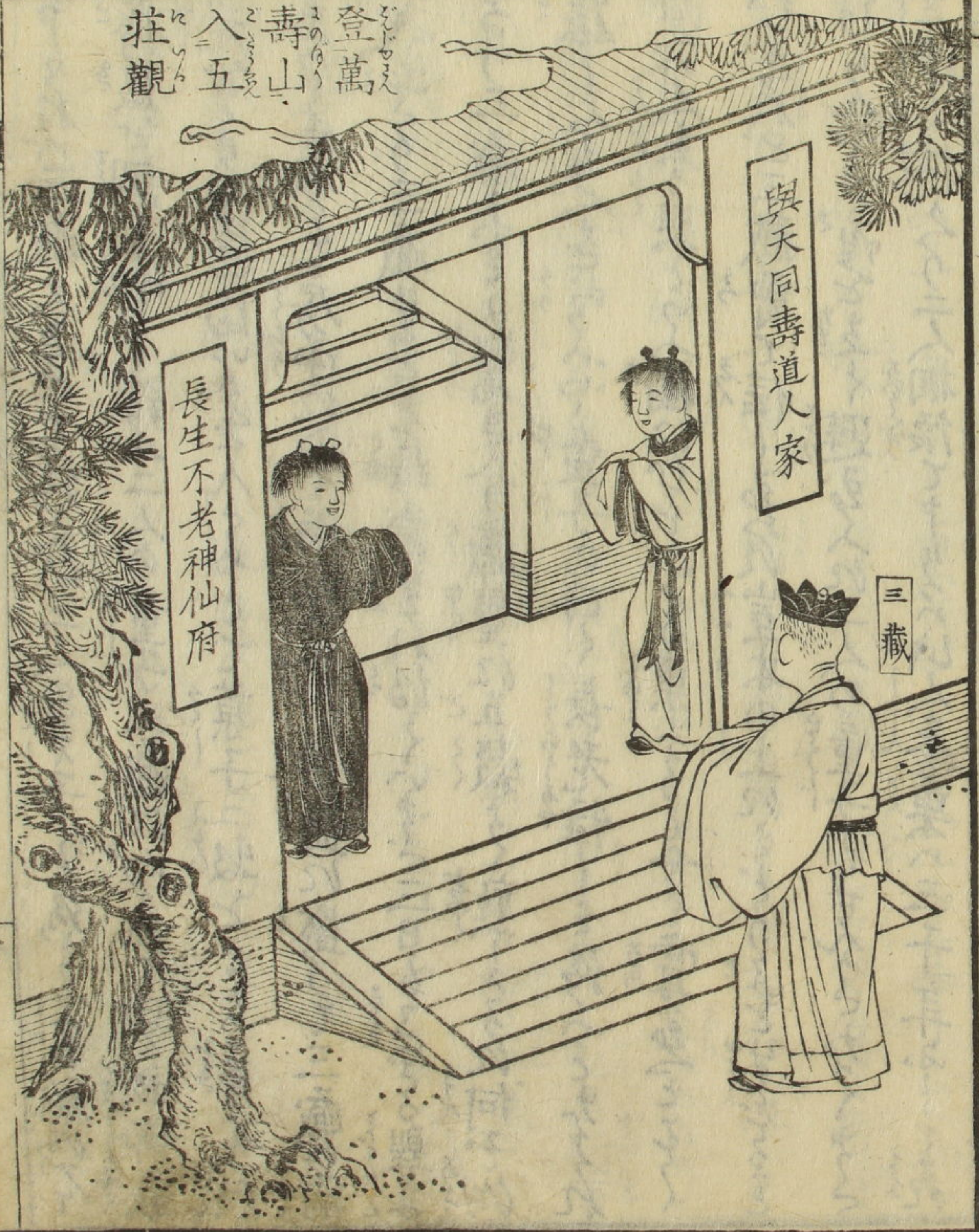
三藏是と讀終く合掌して礼をばはるゝ忽林の内声なりて  
師又我を救ひよある所と叫入はるゝ師弟三人かゝる  
行くれば八戒救條の繩にかゝる付樹の上で吊りつゝ  
悟淨忙ぎ繩を解たせ下し樹の上よかけり帖を指  
ぞくぞく示し教めれば八戒文に慚愧に絶て番成林を  
礼誦し再び行李を背く供をいせまゝせ皆おはれて大  
路にむろひつゝをき路入

萬壽山大仙番故友 五莊觀行者竊人參

ゆきくして萬壽山といふ高山に登るゝ山のすゝたをたゞ  
松拍森くと生繁る層巒疊々岨てり山中に大きな寺あり  
て五莊觀と名け三藏馬より下て山門より入るゝ二人の童子  
多し出れとなりて問く曰く長老ハ大唐より西天に往く徑ぞ  
らとありや唐三藏とていふやや三藏驚く曰く貧僧  
則是より仙童のほしてこれを知りある二童子曰く我師ハ鎮  
え師混名と世同君とやけ仙人とせは前日え始天尊の請符  
により上清天彌羅宮におりしを路入の三藏よりあはれ  
もそはまゝあはせよ我々に分付るゝ老師且入く休是れと



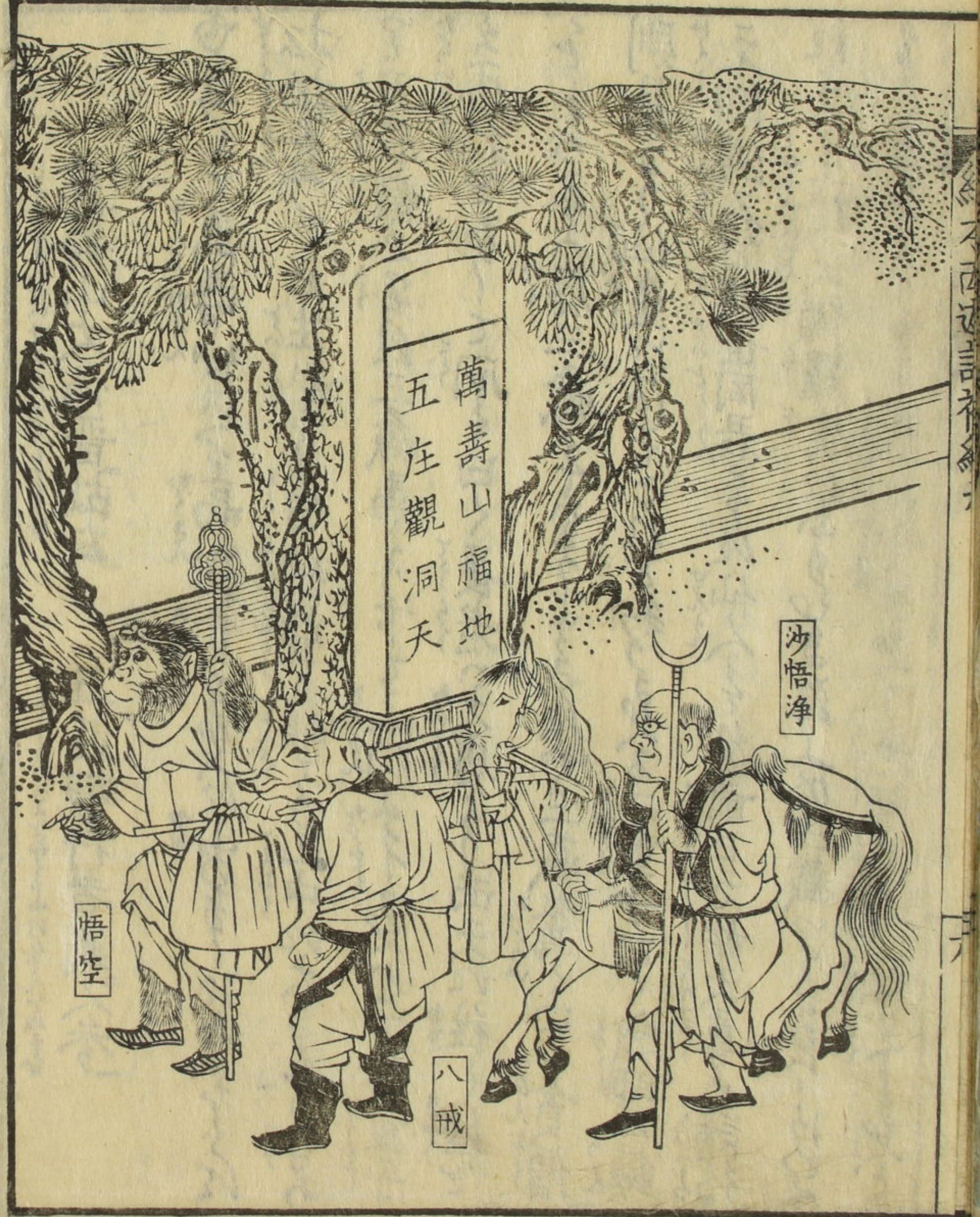
登萬壽山  
入五觀莊



與天同壽道人家

長生不老神仙府

三藏



萬壽山福地  
五庄觀洞天

沙悟淨

悟空

八戒

增不百符口門南

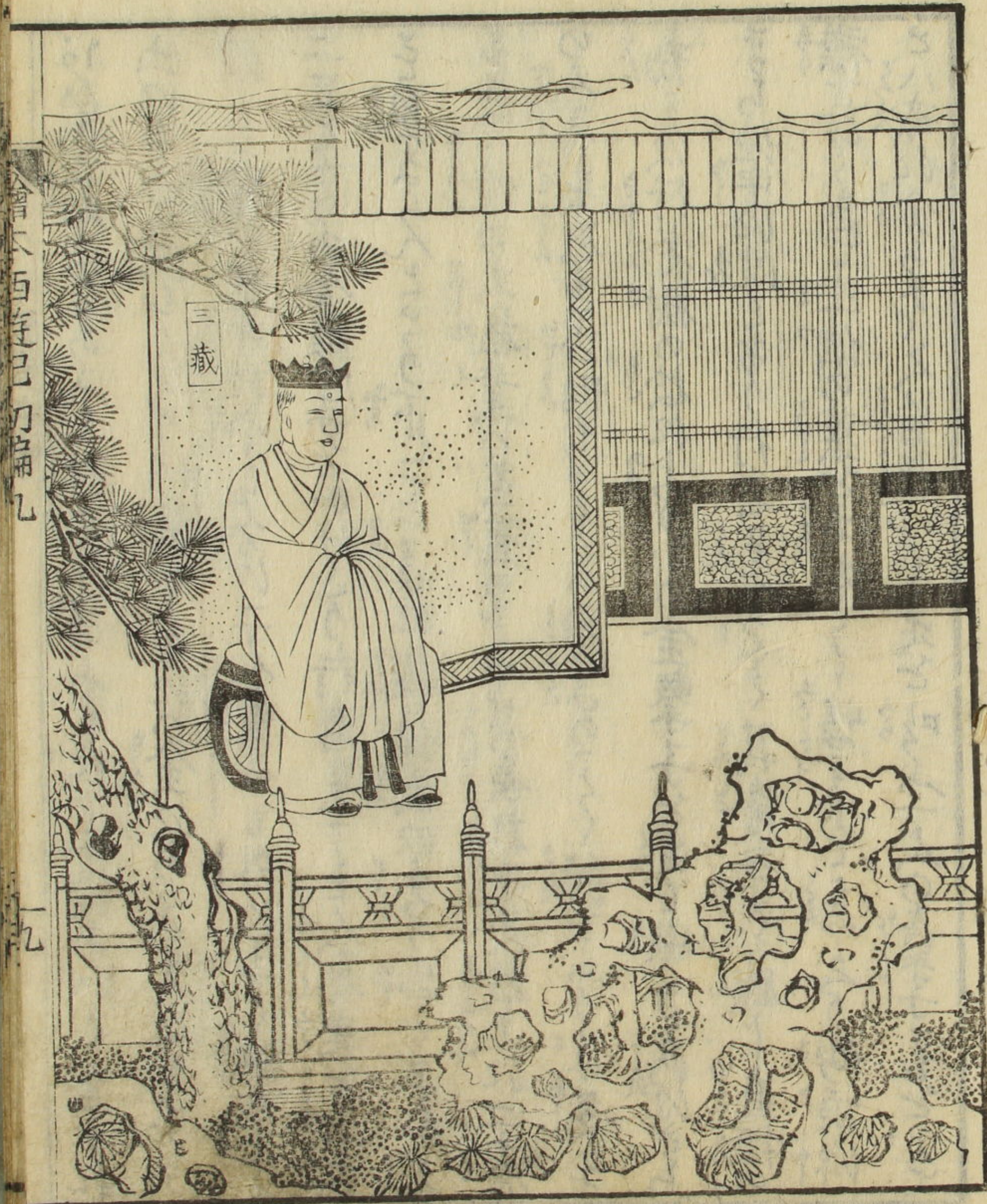
經不西述言補錄



中つれば三藏大きにうけとび三人の弟子とてあつても客殿にて  
 齊飯を調へ喫ひ終り二人の童子三藏に向ひて曰く我師長  
 老とてははゆつらんとして菓子二枚とてささげり  
 まつせんを房中へ今つ兩個の果と丹盤に盛りて三藏の前  
 持出せり三藏是をみれば生れぬといふ二日もさざる嬰  
 あり三藏大きに驚き今歳豊に五穀よく熟しるに何ぞ  
 猿も人もを喰ふや童子の曰く長老怪しき終つとたつれ  
 是の人多果とて樹にむとびる菓なるもよく賞むとて  
 むもれど三藏曾て信しむらん堂本の上にもつらりまはせり  
 けらんやと座をまき避むる二人の童子もせんうたつて  
 房中へ持入り二人相話てやうりけ人參果ハ三千年ふりて死

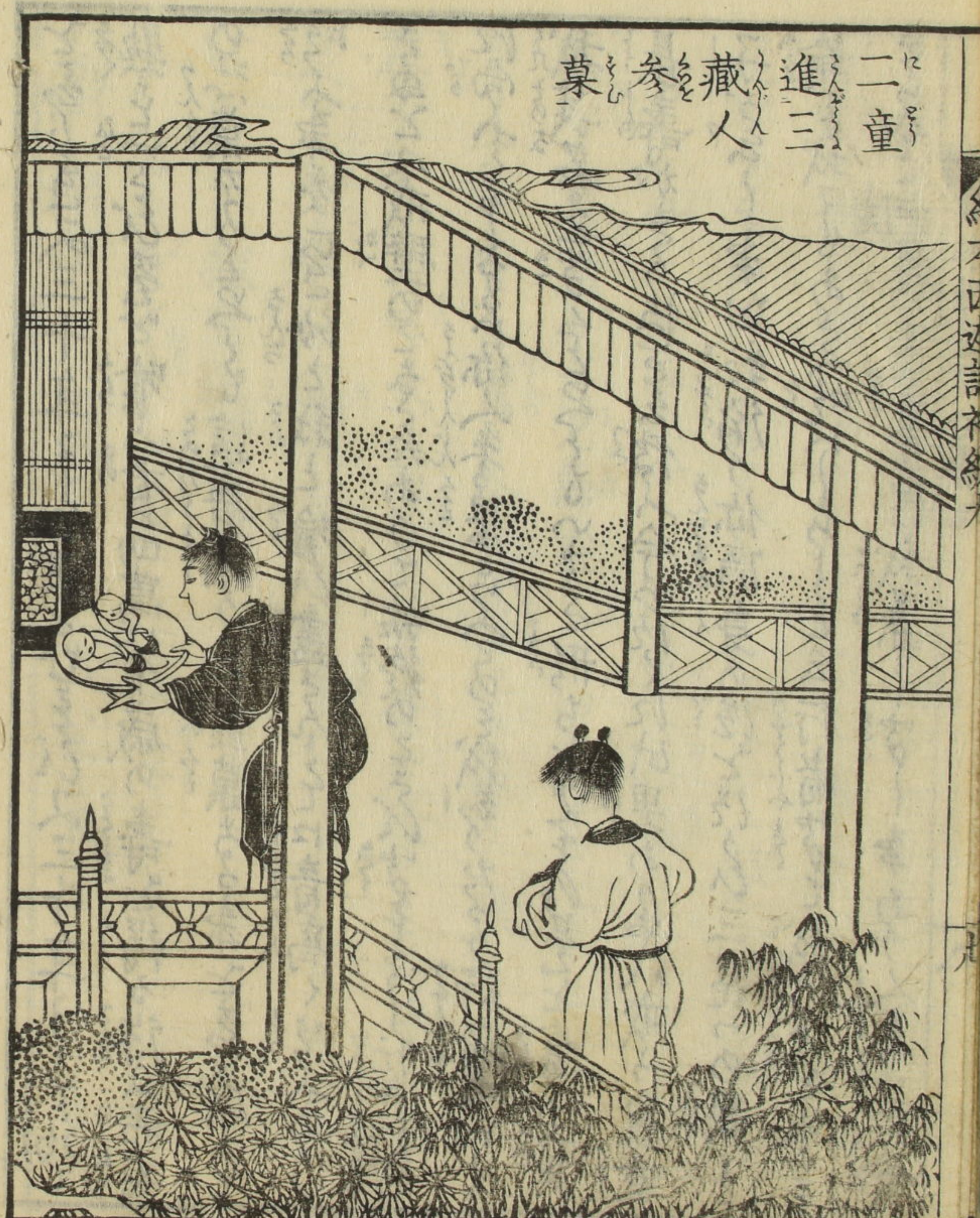
とあつても又三千年うて果とびとび又三千年うて初て  
 熟と一とびを喰ふ者ハ四萬八千歳の壽を得る得る希有  
 の珍菓なりとてこの遠唐僧うくる靈菓なる事とてさすべし  
 吃ふ事はじと我と喰ひ盡さんとて口音高く吃ふあり  
 さぬと八戒壁のこまをありて始終のこまゆりて修行者  
 に向ひてやちる人參果とてさすべし我知りたる修行者の曰く  
 我其名をさすべしとていかに形ちとてんを食ふ者ハ  
 長壽がまはるといふ今にけ果ありや八戒の二童  
 子が云ふ事と物得り你隱身の法とてさすべし三つ口の果を  
 偷し我もあつて吃へりといふ行者やめて我け果とぬと  
 とらん何よりとて我兼くすべし事あり人參果ハ金





繪入百蓮已切備乙

九



莫參藏進二  
人三童

繪入百蓮已切備乙

九



らひく落本はあまき枯水にさくく化し火にあひく焦れ  
出にあつて洗むとつりけ菓をとるに金にあらとんばさる  
流と暗に房中に入るに二人童子も外にさく牖の上  
二尺むりの金撃子とかけり行者是と人參果とお  
と具さらんととり下して一々に提後園にさく出く是と見  
もは一株の大樹葉ハ芭蕉のぞく其長板千尺枝上に二十余  
の人參果形も出形ちやとの嬰子のぞく顔とつりは是と  
初は行者樹の枝の上かの金撃子とて敲きあはら  
まら地中の流とあり行者是とて其奇かると感し直禪の  
襟とひらき三個の菓とおかしく懐とてさくつり妙悟  
と八戒に分らましく皆收んぐ是と吃し一人の童子是とて

大きき驚き忙ぎ三藏の前にさくつり罵てやちるは你三人の  
弟子吾師父の秘置と人參果と偷と吃し你はをを  
たろう三藏おと驚て曰く人參果とんは童子湯とる嬰  
子はつらばや吾徒弟何のなるか怪しき菓と偷とる  
つらば今吾これとれとて大音に三人を叫ぶは妙悟  
降せとちるは今師父のまは我くと呼ぶは果と人參果  
の事なるは行者の曰く是飲食の小事なるは我知らばと  
とんは何の事らあはとて吃し三藏の前は跑行る

鎮元仙趕捉取經僧

孫行者大闹五莊觀

繪本西遊記日刀編九

は三藏三人の後弟にむい你們誰う人參果と偷らるや八戒





西遊記卷之九



三從者謀  
盜人參菓

沙悟淨

悟空

八戒

西遊記卷之九



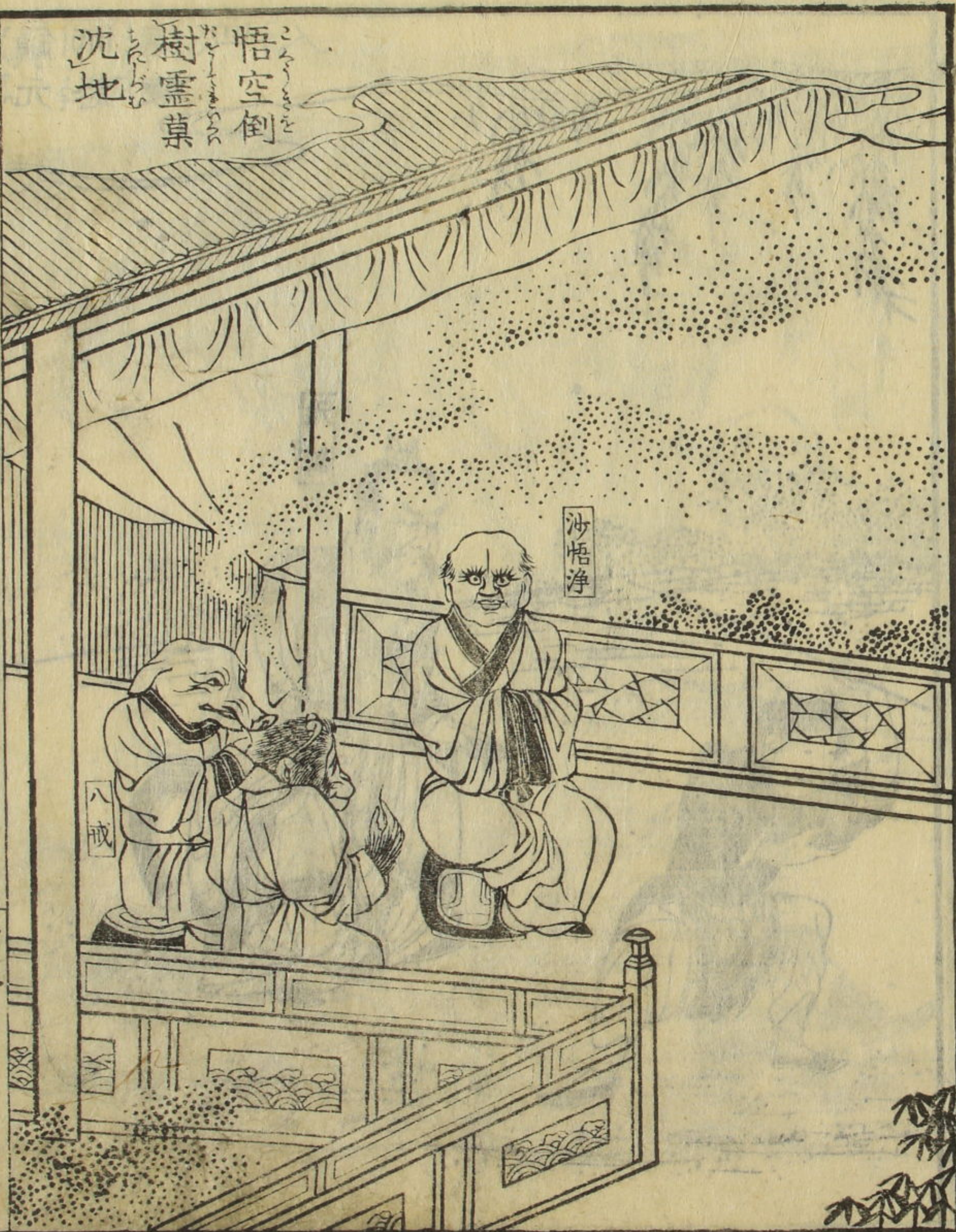
とうらひとて言ひくられらるるのむさくるしき行者は  
 ちやうとおけえは吃くと噴き笑ひ童子指じてかの笑ひらる  
 者こそ人參果を偷まらるる行者の曰く笑れ我生質を  
 你菓子の方とて我をひらんと疑ふことたうれ三藏  
 の曰く後弟皆出家人より夜や殊に偷まらるるべし  
 言して四張きは何ぞ偽りと申すや行者師父の言を  
 理ゆると言て我を偽り申す人八戒は果を吃りて我  
 望むより吾この菓三個と落して三人に分ち食ひり童子  
 子の曰く你こそ偽りと云ふことたうれ你をちと偷まて三つと云ふこと  
 云う八戒を言て行者と恨むと曰く你我に只一つとあふと  
 却て你の二つを食ひながらん行者んよちのちのち童子

もやうにききぬる菓子と三つ四つとりたまはると何不どの  
 事うららん索性は樹を引倒しききのれとくまんと忽  
 ちち一根の毛と抜く行者と哀れ其所を産せしめ本分の  
 人參園に飛行き金箍棒を振て枝も多もとりくおたふし  
 推山移嶺の神通をはひかの大樹を一推よち倒せば遠人  
 多果のそと地地下に沈むと只一個ものころもは行者ん  
 地よりとよりび旧のおいさゆりさゆりて侍にてたうらる  
 け時二人の童子さうやきてゆらるる向より二人の者とも一言の  
 答もなかり黙して在り或人參樹高く葉毎きにより我  
 軍が扱へたがらるるも知るべし今一交査せば可あらんとて両  
 人ひとく後園に出るはとをまのひよりの樹に倒に



悟空倒  
樹靈菓  
沈地

會天西遊記刀編九



沙悟淨

八戒

十三

繪本西遊記卷九



悟空

十三





鎮師縛人  
元怒鞭





おたをれ菓へ一個も入んぞれば二人の童も肝と償へこれ  
かたは毛臉和尚のまをさかづべし渠等四人をともく置て師  
父の海をを人と待くけうらまをを待べしとて西人ひくく客  
殿の門を撲的とぞう外面より罵てやするの你等禿賊人參  
菓と偷とらひ又仙樹を推倒する何のうらまひぞや其所ふ  
けうそ我師父のうらまを待べしとて都く門に鎖を下  
し房中ふらうらる三藏をれとんぞく你く行者とらふ又侍ら  
菓をとりと食ひてさあふたふぞかの樹とあて倒したるや  
行者の曰く師父を安んぶとぞく我にやせまんとて既り  
目もろれ果ていとくらにころにたうらぬもべ行者耳の内より金  
槌棒とらう出く門上よむいといとむいよひけり門の扉忽

か嘲的といらなり忙ぎ師父を請く門と出馬にかきのせ  
八戒ゆ悟淨後に引く道とまきて馳うらるとどに行程り  
五十余里と走る所より一人の行脚出まらう三藏に向ひてや  
あらへ長老いづくへ往まらや三藏の曰く貧僧ハ東土の者西天に  
往く徑とめらめらりかの行脚の曰く長老東より来らむつ  
か真道が住所萬壽山五莊觀と過く本もるう行者これと  
言く忙ぎ前にとて答て曰我門曾くたやのふを過り  
らびはめりの行脚行者とらとことあてと你這濃猴我と誰と異  
五莊觀の大仙鎮元師ハ我らう你人參樹と打倒しおぬた  
さうくぬれまら快く回うて吾本と返とてべし行者大さな怒り法  
棒と引ゆあてかる大仙勿ら本相を成りし塵尾とともく

曾不西遊記の編し

十一







鉄棒とうけくら袍きの袖さひらき四人の僧と馬とに引つこ  
提けて觀中にゆり徒方に令とて三藏とはじめ四人の僧と柳  
の本を縛り付龍皮とて召れる七星鞭とさると出く童子  
令じて是をおしむ童子の鞭と取て問く曰く先何まの僧  
とお中ぶきや大仙の曰く唐三藏吾に不遜なる先三藏より  
おろくびく行者是とぞて声と揚く曰く先生羞ひあり  
菓子と偷え樹を倒したるいとく我より師又とゆはく先  
我をおろく大仙あて這猿猴却くつ所は理ありと行  
者う腿を三十鞭うじりぬ其時行者腿を奪て臆とほ  
只童子のおしむに日既に西に沈むぬき明日再び鞭お  
しむとまなく裏面に入く其後いその人声は三藏の両眼

より涙を流し你等とあべのさざりひと引せ我を帯  
累にほてかふる罪と受むむしてはあをのづれ出んや  
行者曰く師又かきむらうむむいもま我今救ひ出さるや  
奪しとて縛り素とん毒く脱出三人のいやくりまをさるや  
く解柳の枝に個と折く素とむく縛り付舌を嚙て鬼又と  
唱へうの枝に吹かれバ忽ち多て三藏師等四人が像と化し  
たりたり行者今へん安しとて西に向ひくまうりり羽朝大仙  
再び殿上より出童子の令し今日四人とも三十鞭と打べしと  
て先三藏よりおしむ八戒の悟淨とて行者とおろめ不  
思議や今まて在し四人の僧忽ちまら多くと柳の枝とまらに  
る大仙是と刀を孫悟空實に神通とほく我まと提すま





語六

行者 脱身 打破 油 鍋





らんと言に危のり須臾のるに追まら孫行者とてくまの吾人參  
樹を返とぐと叫われの行者八戒沙悟淨三人ひとくとも  
大仙と中にゑらち殺さんとひりきさる大仙あつても騒ぐは再び  
油と弄きて四僧馬供に引きく観中に花ゆり油の中より拾  
出しての索をとかかぬ衆仙人に命じて庭前に大鍋を居へ油をた  
たく孫行者と金煎にせんと油の煮ると待たり行者を中に  
おのひるへ我はけは久しく洗滌せむ幸この油をて行水せむとろ  
よからんとおのひをじがば大仙とる者なればいふる法をつひ  
我をぬのりとせんも斗りぐにといは油を試く後我自る洗滌  
せんと側なる大石と行者と交り本牙の空中にまき油鍋とのど  
きあつり已は油焼儂の黒烟の溜くとまよるほど童子三四人

まよりて行者とかきおげんとるに其重き本盤石のじ  
後に二十四人の仙人あつりてやりくにも上げくの油鍋(お  
入るるに鍋の底忽ちたけお破れ焼儂るる油四方にたきあつ  
傍に在る仙人達臉もも足も焼たれあつてろとろきよく  
よく見れば行者はなくて一塊の大石火中にあり大仙これを見て  
大きに怒り儘猴我鍋をた砕きたるを安かき鍋を改め  
て唐三藏を前殺し出氣とまこととておのれ鍋を改め  
せ再び油を焼んとて行者は俵とつて急に空中よりお下り  
大仙にむひれとは先生怒りを止りま吾先に小便急るは  
お表料理の鍋を搦とやとて小用に行るなり師父とゆいて  
我と鍋に入るとま大仙大きに怒りひ你俵に神通あり吾人參

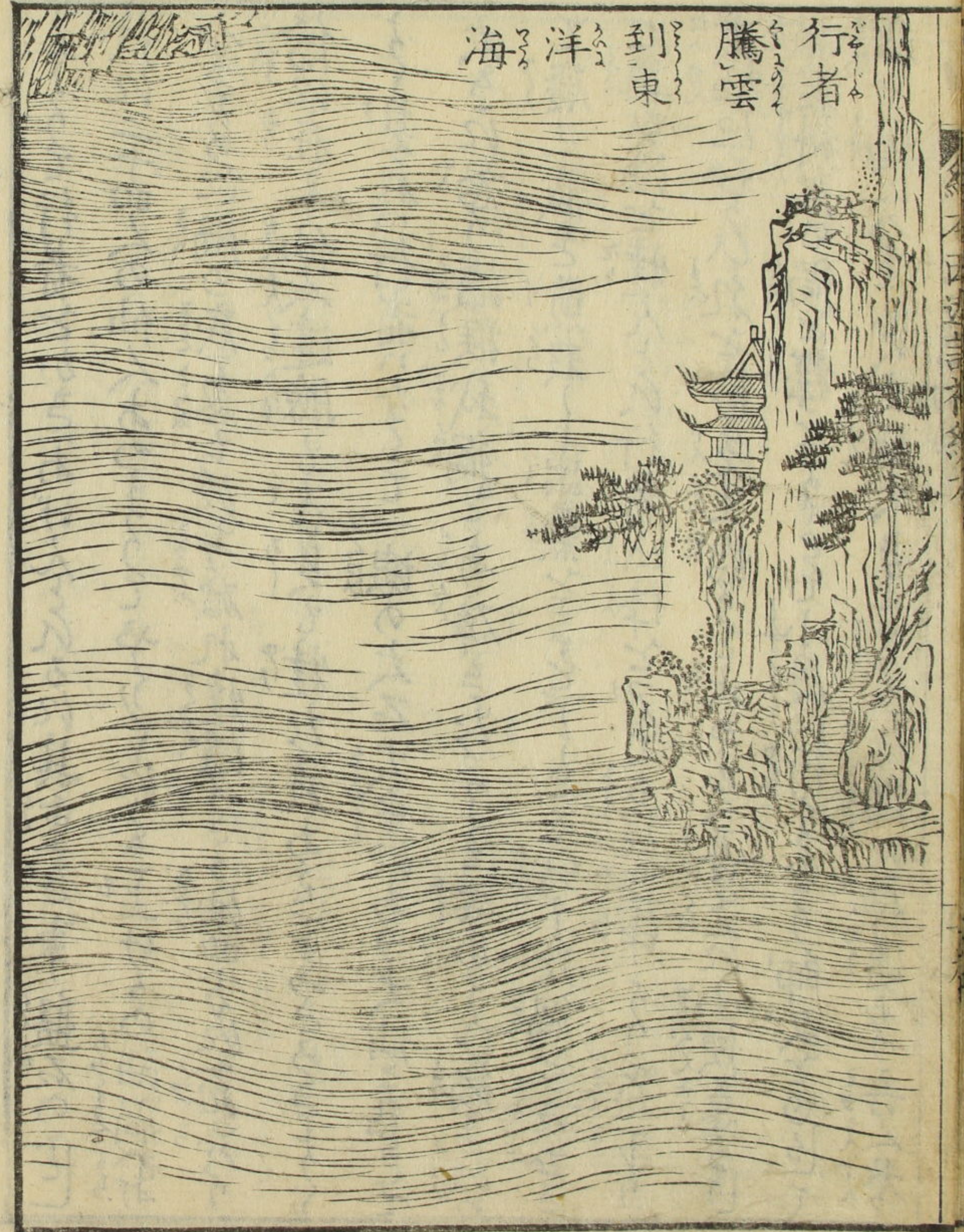




會不西遊已切扁乙

悟空

七



行者騰雲到東洋海



樹と返す六我もやうと你と足元の約とたてん行者の曰く大  
仙我師又のいほめと免くむる我かきぶ人衆樹を活し  
さん安にあらく大仙先三藏を解しは八戒の悟得も共に索  
と解き正殿に清くぬま六三人收ぶとわきうはめは三藏行者  
に向ひ你いほしころの樹を活さんや行者曰く我今東洋海に  
行く普く三島十洲とわたりと流くの仙人商量くと起死回  
生の法と求めかきぶは本と醫しやさんと大仙三藏に三日の  
暇ととい船斗雲舟騰り東海にてもまきりる

繪本西遊記初編卷之九終



